

北九州 EVENT TOPICS

連携室の仕事

福岡県水巻町の遠賀中間医師会館で2月26日に開かれた第138回患者塾。後半のテーマは「連携室の仕事」。転院先の紹介やセカンドオピニオンの相談など患者がより良い医療を受けられるような調整役としての役割について、病院の連携室担当者が説明した。

転院・退院

宮本さん 今はいつで、その手助けをする病院に長期的に入院の医療機関の連携室でなくなっている。患者さんの役割です。患者さんが話しかけていきます。そうなる患者さんの治療や希望に応じます。早い段階から自宅や家族は「では次は、病院や施設を探し、スを訪問し、病気を抱える

患者の希望に応じ支援 帰宅に向け生活調査も

どこへ行けばいいの、ムースに転院できるよか」「どうやって探そう支援をしていきたいと思います。退院直前に準備する

- ◇出席された方々
西野 憲史さん—西野病院院長 (北九州市)
宮本 智恵さん—西野病院医療相談室主任
伊藤 重彦さん—北九州市立八幡病院副院長 (外科)
安永香菜子さん—北九州市立八幡病院連携室
津田文史朗さん—つだ小児科アレルギー科医院院長 (福岡県水巻町)
辛島 則子さん—遠賀中間医師会おんが病院地域医療連携室 (福岡県遠賀町)

- ◇司会
小野村健太郎さん—おのむら医院院長 (福岡県芦屋町、内科・小児科)



宮本智恵さん

小野村さん 患者さんが自宅に戻った時に、家族としてどう対応したらいいかというところまで連携室は相談に乗っていますか。宮本さん 患者さんや家族の希望に対して情報を提供し、どうすれば安心して生活できるのかを考えるのが医療相談員の仕事だと思っています。家族が不在時のケアをどうすればいいかという心配も多く寄せられます。その場合も自宅を訪問し、何時から一人になるのか、デイケアに行けるのかなど患者さんの1日の生活を調べて総合的なサポートの方法を院内で検討します。

患者塾

記者の一言
恥ずかしながら「連携室」のことを、ほとんど知らなかった。自分や家族の経験が影響せず、転院を考えなければいけないようなケースを知らなかったのだ。だから、患者塾で

第139回患者塾 最期のときを自宅で

「自宅で最期の時を過ごしたいのだが、家族に迷惑をかけそうだし、とてもできそうもない」というご相談をたくさんいただきます。確かに病気の種類や条件によっては、在宅で経過をみるのはとても無理なケースもあります。しかし、多くの場合、さまざまな仕組みを利用することで自宅での看取りが可能になる例も少なくありません。
「胃ろうがあるので、自宅ではとても無理でしょうね」という相談もよく寄せられます。一番多いのは「痰がよくからみず。せこせこがあると恐くてとても対応できません」というもの。しかし、例えば訪問看護を正しく利用することで解決する例も少なくありません。今回は、訪問看護認定看護師にも参加してもらい、在宅で最期の時を迎える可能性を話し合います。

3月26日(土) 午後3時~6時
遠賀中間医師会館(福岡県水巻町下二西2の1の33、093・201・3461)

別の医療機関を紹介 スタッフが補足説明も

小野村さん 患者さんの希望と医師の診療方針が食い違った時、相談に動くことはあります。
「少し後ろめたい」な院でセカンドオピニオンを受けたら、こん

質問は事務局へ
〒807-0111
福岡県芦屋町
白浜町2の10
「おのむら医院」内
電話093・222・1234
FAX093・222・1235